

こころ、からだ、いのち

中野 重行

大分大学名誉教授
大分大学医学部 創薬育薬医療コミュニケーション講座 教授

連載④

「原点、忘るべからず！」
何事にも「原点」がある。

～原点と自分の居る位置、原点との距離を意識して生きることの大切さ～

●「海外研修制度の誕生とその発展」

最近、「原点、忘るべからず！」という言葉が頭に浮かび、遠い昔の思い出をいくつか反芻する機会がありましたので、本稿ではそのことについて語ってみたいと思います。もちろん「初心忘るべからず！」という世阿弥の「花鏡（かきょう）」の中に出てくる有名な言葉の「初心」を、「原点」に変えただけのものです。しかし、ここに出てくる「初心」という言葉は、一般に「初めの頃に抱いた志」という意味で理解されることが多いように思いますが、言わんとしていることの真意は「初めの頃の志」でもありますが、同時に、本稿で述べる「原点」にも近いように思うのです。

つい先日、2015年12月9日から3日間、第36回日本臨床薬理学会学術総会が東京で開催されました。この学術総会で、「臨床薬理学会の将来を担う海外研修修了者達の提言」と題するシンポジウムが開催されたのです。日本臨床薬理学会の前身となる「臨床薬理学研究会」に、日本製薬工業協会の支援により海外研修制度が発足して、本年が40周年になることを記念して企画されたシンポジウムでした。文字通り臨床薬理学会の将来を担うであろう40歳前後の、まさに働

き盛りの3人の演者とともに、ワンジェネレーションも年上になる筆者也、シンポジストとして参加しました。筆者に期待された役割は講演タイトルにズバリ表れており、「海外研修制度の誕生とその発展：今後への期待」を語ることでした。日本臨床薬理学会の海外研修制度は、CRCにも門戸を広げて発展しています。

海外研修制度が発足した1975年は、筆者は医学部卒業後10年目に当たる年で、医学部の薬理学講座の助教授に成りたての年でしたが、第1回海外研修員として、米国スタンフォード大学と退役軍人病院（VA Hospital）に2年間留学しました。初代研修員の選考ということで、選考委員の方々も慎重に審議を進めた様子が、選考理由を学会誌「臨床薬理」に掲載していることからうかがえます。選考理由が公表されたのは、空前絶後、このときだけでした。曰く、(1)基礎と臨床を兼ね備えた豊富な臨床薬理学的研究歴、(2)帰国後の臨床薬理学的活動に関する安定した見通し、(3)研修に必要な基礎知識と語学力の保証（ECFMG合格）、(4)臨床薬理学研究会における研究歴の長さおよび活動性、の4点が挙げられています。

なお、第1回海外研修員の選考には、筆者を含む5名の応募がありました。臨床薬理学の領域では、筆者が一步先を歩んでいたことが評価されて選考されたのだと思いますが、その後全員が臨床薬理学領域で海外研修を経験して教授になり、全員が日本臨床薬理学会の理事に選ばれ、4名が学会長（現在の学術総会会長）、3名が理事長になって、わが国の臨床薬理学会の発展のために活躍しています。

筆者が海外研修員として留学した当時は、まだインターネットなどはありませんでした。そこで、海外留学に関する情報が乏しく、半年ごとに筆者が書いた研修報告書が「臨床薬理」に4回掲載されていますが、最初の2回は主として米国の臨床薬理研修制度（筆

者が経験したスタンフォード大学とカリフォルニア州立大学サンフランシスコ校）の研修プログラムの紹介をしています。3回目は臨床薬理学領域におけるトピックスの紹介（現在の「動的割付」という方法が「Minimization」という名称で初めて米国臨床薬理学治療学会（ASCPT）で報告されたことにも触れています）、4回目はわが国における臨床薬理学の進め方に関する筆者の思いを記しています。

臨床薬理学研究会が設立（1969年）された頃の日本国内の状況は、医薬品の有効性・安全性・使用法に関する問題が山積していました。たとえば、薬害としてのSMON（キノホルムに起因）、ビタミンB₁₂大量療法の変延、大腿四頭筋拘縮症（乳幼児への解熱鎮痛薬・抗菌薬の筋注に起因）などがあり、市販されていた医薬品の再評価の必要性も叫ばれていました。「臨床薬理学」という学問は、未熟なままで、まだ揺籃期にありました。

●約40年前に示した臨床薬理学会の「原点」

海外研修を終えて帰国後間もなく、「臨床薬理学研究会」から「日本臨床薬理学会」に発展させるための準備会が開かれていました。学会に発展させるにあたって、いろいろな意見が出て紛糾しているもので、1つにまとまるような方向づけを意識して、海外研修修了者としての見解を「臨床薬理」の巻頭言として執筆するように依頼を受けました（中野重行：＜巻頭言＞臨床薬理学会設立に望む、臨床薬理9（4）：353-354,1978）。この巻頭言には、筆者のその頃の熱い思いが比較的素直に語られています。今回、久し振りに読み返してみても、本稿の冒頭に掲げた「原点、忘るべからず！」という言葉が頭に浮かんできたのです。

この巻頭言には、治療医学の発展に貢献する学会と

して機能するだけでなく、臨床薬理学会の理念が「治療の科学性を確立するプロセスを重視すること。目の前の患者に最も適した薬物を選択し（「薬物を使用しない」という判断を含めて）、最適の投与量と投与方法で治療を行うために必要な科学的データを集積し、体系化して、治療の場で実践し、治療の有効性と安全性を最大限に高めること」（これが臨床薬理学会の「原点」）と記しています。そして、臨床薬理学会の社会的使命は、研究、教育、サービス活動が三本柱となるが、わが国の当時の状況から考えると、当分の間は研究と教育に全力投球することが必要であること。さらに、各臨床薬理学会の役割としては、社会から期待されていることの中で、自分にできること、かつ果たさなければならぬことを責任を持って受け持つこと。その際に、臨床薬理学会の「原点」と自分との関係を意識しながら、同じ方向性を持った者を同じチームのメンバーとして位置づけて学会を運営することが望まれることを語っています。

そして、40年近く経って歩んできた道を振り返ってみると、この巻頭言に書いた通りのことを、比較的忠実に実行してきたように思います。臨床薬理学会に関する研究と教育は、臨床薬理学会として当然行うべき社会的使命です。しかし、人は「時代の子」であって、その時代に特有の「時代が求める社会の期待」があるので、「社会の期待に誠実に応える姿勢」を大切にしながら、自分の「持ち味を生かす」ことが何にも増して重要なことのように思います。サービス活動もこの中に含まれます。最近よく叫ばれるようになった「Integrity」という言葉は、辞書を引いてみると、誠実、高潔、公正などの意味が書かれています。まさに「社会の期待に誠実に応える個人としての姿勢（心構え）」のことを表しているのではないのでしょうか。

なかの・しげゆき 岡山大学医学部
卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理
学部門に留学。大分医科大学臨床薬理
学教授、大分大学医学部附属病院長、
大分大学学長補佐などを歴任。大分大
学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬
医学教授、国際医療福祉大学大学院教
授を経て現職。日本臨床薬理学会名譽
会員（元理事長）・専門医・指導医、日
本臨床精神神経薬理学会名誉会員（元
会長）、日本心身医学会功勞会員・認定
医・指導医、日本内科学会認定医、臨床
試験支援財団理事長。響き合いネット
ワーク連絡協議会理事長として、医療
コミュニケーションを学ぶ全国的なワー
クショップ（大分、岡山、東京、長崎、
山形）の企画・運営に携わっている。
[http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/
index.html](http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html)

